

はじめに

この本は、第一義的に、小学校における外国語活動のため使われることを想定して書いたものです。外国語活動——現実的には、ほとんどの場合、英語活動という形態をとるものと思われます——のためと言いながら、具体的教材を提示した「実践編」には外国語はほとんど登場しません。その点に違和感を感じられるむきも多いかと思いますが、まさにそのことが外国語活動に対する筆者らの立場を端的にあらわしたものだといえます。以下に、解説しましょう。

2008年3月に告示された学習指導要領で、小学校高学年における外国語活動が必修化されました。小学校関係者はもちろんのこと、小学生ややがて小学生になるお子さんの保護者の方々、マスコミ、教育産業、そして、広く一般の方々もこの問題に大きな関心を寄せ、さまざまな意見が飛び交っています。しかし、筆者らの目には、学習指導要領の表面的な理解が先行しているように思えます。

たしかに、「外国語活動」とうたってはいるのですが、その目指すところは「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」にあると記されています。関連して、小学校段階では、「小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培う」ことや、「言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせる」ことが重要であることが明らかにされています（菅正隆文部科学省教育課程教科調査官「解説 変わる学習指導要領11 ここがポイント 外国語活動」『日本教育新聞』2008年2月18日）。

つまり、小学校における外国語活動は英語の運用能力を育成することを本義とするものではないのです。文科省用語では、英語の運用能力を「スキル」と呼びますが、小学校英語はスキルの育成を目指すものではないのです。

その点を裏付けるように、小学校英語は、中学校段階の文法等の英語教育を「前倒し」にするのではないことが強調されています。同時に、小学校英語は学級担任が主導するものであることも繰り返し述べられています。

このように考えると、新しい学習指導要領に示された小学校での外国語活動は、小学校英語に対するさまざまな期待（子どもが英語を使えるようにしてほしいという保護者からの期待、英語が使える人材を社会に送り出してほしいという経済界からの期待、小学校英語の導入によって早期英語教育市場を一層活性化させたいと望む教育産業からの期待、などなど）に現実的に対応可能な形での落とし所を探っていた文部科学省にとって、ほとんど最適解といってもよいほどのものといえます。

その本質——本音——を十分に理解した上で、外国語活動に対処する必要があることはいくまでもありません。文部科学省では、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要であるとして、「英語ノート」（仮称）を作成中です。公開されている「内容見本」を見る限り、英語の仕組みや働きに深入りすることは慎重に回避されて

います。仕組み(文法)を教えないで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成しようという、所詮、無理な問題に対処しようとするのですから、これは非常に現実的で、賢い知恵です。

あとは、その知恵を最大限に生かして、子どもたちの発達を支援する術を模索することです。そして、筆者らは、英語(外国語)をとりあげなくてはならないという足かせを配布予定の「英語ノート」などでさらりとかわし、あとは多くの子どもたちの先生方の母語である日本語を使って「言葉への自覚」(私たちのいう「ことばへの気づき」)を促し、「言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせる」よう工夫すればよいと考えます。

冒頭に述べたように、この本は、第一義的に、小学校における外国語活動のためのものです。しかし、それ以外の使い方も考えられます。新しい学習指導要領を貫いている考えのひとつは「言語力の育成」です。そして、その育成を教科横断的に行うことが強調されています。その意味で、この本を外国語活動のためだけでなく、たとえば、総合的な学習の時間のために使うことも、国語のために使うことも可能です。とくに、言語力の育成の中核を担う教科とされている国語の時間にこの本の「実践編」の一部を利用することも大いに意味があることです。

また、子どもたちがことばの力を育んでいく支援をするためには、まず、先生方のことばに対する意識を高めていく必要があります。この本はその目的のためにも使うことができます。先生方のことばの意識が高まれば、この本の「理論編」を参考にしながら、ご自身で実践用の教材を開発することも可能になります。

ことばの楽しさ、豊かさ、怖さについて、この本一冊の中にすべてを盛り込むことは到底不可能です。この本で提示する、教育の新たな可能性について、多くの方々の賛同を得て、今後、この本の続編も世に問うていくことができればと願っています。

この企画を充実させていくためには読者のみなさんからのフィードバックが不可欠です。ぜひみなさんの感想、ご意見などをお聞かせください。慶應義塾大学出版会編集部宛の郵便あるいはファクスでも、著者宛の電子メール(oyukio@sfc.keio.ac.jp)でもけっこうです。よろしくお願いいたします。

ことばは人間だけに与えられた宝物です。ことばは楽しく、そして、とても奥が深いのです。その仕組みや働きを理解することによって、ことばという宝物を存分に活用することができます。この本によって、そうした試みの重要性をひとりでも多くの方々に理解していただけたらと、私たちは願っています。

2008年 春

大津由紀雄
窪蘭 晴夫